

### トビタッタ！柏原！

研究推進部部长 丹生 憲一

暑かった夏休みが終わりました。柏原では7月下旬に35度を超えた日が5日も続き、お隣の福知山で8月下旬に39.8度という気温が観測されました。ここまで来ると、「異常気象」という言い方は改め、我々の持つ勝手な「正常気象」という定義を変えなければいけませんね。先週、台風20号は観測史上最高の風速を記録し、近隣でも多くの建物に被害が見られました。

被災された方々に心からお見舞い申し上げます。

さて、夏休み前のNo.11は「トビタテ！柏原！」というタイトルでしたが、その呼びかけに答えて、多くの柏高生が国内外にトビタッてきましたので、数回に分けて紹介します。海外研修に参加した生徒の皆さんには、文化発表会の中で報告してもらおうことになっていますので楽しみに。

### 8月10日（金）兵庫ユニセフ協会訪問 探究Ⅱ 足立愛佳・黒田唯央・玉山風葉

「世界の貧困」を考えている班では、神戸市灘区にあるユニセフ協会を訪問しました。まず、ユニセフが世界で取り組んでいる活動全般、特にSDGs（Sustainable Development Goals:持続可能な開発目標）について詳しく説明をしていただきました。2015年、「1 貧困をなくそう」「2 飢餓をゼロに」「3 すべての人に健康と福祉を」「4 質の高い教育をみんなに」…と17の目標が国連で採択され、2030年までに実現しようとさまざまな取り組みがなされています。本校の探究Ⅱのメンバーは「教育」「フェアトレード」「医療」「水問題」という違った切り口から貧困の解消を考えており、今回の訪問で、自分たちに何ができるのか考えるヒントとなったことでしょう。協会の方から強く訴えられたことはまず、「知る・学ぶ」ことが大切。そこから「行動する・募金活動」をはじめ、自分たちで「考える・企画する」人たちになってもらいたいということでした。子供たちを栄養失調から救う、ビタミンの錠剤が一粒1円で買えること、マラリアの媒体となる蚊を防ぐ蚊帳が現地で生産されていることなど、新しく学んだことが多くありました。2学期の探究活動を経て、彼女たちが「行動」を起こし、「企画」できるまで成長してくれることを期待しています。



### 8月20日（月）～23日（木）カンボジア研修旅行 探究Ⅱ 久下瑞希・舟川叶夏・余田美月

「こどもの教育」「伝統文化の継承」に取り組む3人が、カンボジア王国へ渡りました。東南アジアにあり、雨季にあたるということで、蒸し暑い気候を覚悟していましたが、今年の日本の夏にはかないませんでした。最高気温は31度。夕方には激しい雨が降り、冷気を運んでくれます。おかげで、ホテル、車中以外にエアコンはありませんでしたが、快適に過ごせました。

朝日に映えるアンコールワットを拝んだ後、IKTT（クメール伝統織物研究所）を訪れました。ここは、消滅の危機にあったクメール絹織物を復活させようと、友禅染め師・森本喜久雄さんが設立され、その生涯をかけて織物の復興に尽力されたところです。青垣の丹波布が、一時忘れられながら、志ある人たちの手によって復興されつつある様子と重なります。二つに共通する点は、織物の工程が、綿つみ・蚕の絹とりから、染色、織り上げまですべて人の手で行われているところです。綿と絹の違いはありますが、木の皮や木の実など、自然素材しか使っていません。蚕のエサを育てるため、染料になるラックカイガラムシが巣を作るために木を植え、その成長を待つ十数年の年月をかけて「森」が作られました。働く女性のそばには小さな子供たちや犬がいて、子育てと仕事を自然に両立されている様子も見ることができます。1枚のストールが10万円ちかくすることも、そこにかけられた年月を

考えると納得しました。森本さんの遺志を引き継いで研究所の運営に携わる岩本みどりさんが、案内してくださいました。

「ここではみんな、生きるために働いています。『生きる』ということは、よい作品を作ることでもあります。日本では、食費、貯金、家賃、教育費、老後…すべてお金のために働いていたように感じますが、ここではお金がなくても生きていけます。どちらがよいということではありません。でも、私はここにきて『孤（独）』を感じたことがないのです。」という趣旨のことをおっしゃったのが今でも心に残っています。

続いて訪れたのは、パンニヤストラ大学シェムリアップ校。本校卒業生・松岡秀司先生が勤めておられます。ここでは、大学生5人と交流する機会をいただきました。「こどもの教育」を考えている久下さんと舟川さんが「自然の中で育つことが子供の情緒教育につながり、自己肯定感も育むのではないか」という内容で、「伝統文化の継承」を調べている余田さんが、丹波布を紹介し、「IKTTでの取り組みから丹波布をさらに復興するヒントを得たい」という内容でそれぞれプレゼンテーションを行いました。大学生の皆さんはカンボジアの文化について紹介をし、お互いに自由に話し合う場を持つことができました。柏高生が英語でどれくらいコミュニケーションをとることができるのか？今後の交流は可能か？ということが試される機会でもありました。翌日、大学の事務局の方から「今後も交流を続けていきましょう」という言葉をいただいたことで、彼女たちは合格だったといえるでしょう。ただし、条件として毎年テーマを変えるのではなく、「継続した内容で双方の学生が取り組めること。」ということがあげられています。「持続可能」なテーマを選び、今年一年で終わりではなく来年度以降も引きついでもらえるようにしていきましょう。



## 8月21日（火）福井県立恐竜博物館 探究Ⅰ・Ⅱ 「丹波篠山層群」班

『探究Ⅱ』ではグループに分かれて、それぞれの課題ごとに研究を進めている。『丹波篠山層群』グループは先輩たちの先行研究を元に丹波篠山層群や丹波竜について調査し、課題に取り組んでいる。丹波竜による丹波市のPR活動についても検討しており、この夏季休業中に、『丹波篠山層群』グループ2年生7名と『探究Ⅰ』の1年生6名で、「福井県立恐竜博物館」を訪問し、今後の活動に向けて、見学・聞き取りなどを行った。

「恐竜博物館」では、まず、「福井県立恐竜博物館」の特徴や誘客・営業・PR活動について説明を受けた。日本一の恐竜資料・化石発掘量や研究実績であること、年間約90万人の来館者があることや研究成果の披露とアミューズメントの提供の両立の重要性などについて丁寧にお話しいただいた。昼食後、館内見学を行った。44体の恐竜全身骨格、中国四川省の中生代の情景を実物大に再現した巨大ジオラマや化石をクリーニングする様子などを見学した。その他に、地球の科学ゾーンや生命の歴史ゾーンなど地学・生物学分野に及ぶ幅広い展示が行われていた。

また、「野外恐竜博物館」では、現在も発掘が続いている1億2000万年前の地層を間近で見学し、博物館研究員の解説のもと、発掘現場で掘り出された石から化石を探す発掘体験も行った。

